



水彩 「御池に春」 吉村 正治 画



宮崎県版

No. 325

治安維持法犠牲者

国家賠償要求同盟

宮崎県本部

〒880-0031

宮崎市船塚3-193

電話 0985(26)4224

FAX 0985(20)3154

郵便振替口座

02070・9・11382

私たちの運動の基本

ふたたび戦争と暗黒政治を許さないために

一、 治安維持法体制の復活に反対すること

二、 国は戦前の治安維持法が人道に反する悪法であったことを認めること

三、 国は治安維持法の犠牲者に謝罪と賠償をおこなうこと

相川勝六（戦前第2代宮崎県知事、戦後県選出国会議員）について(1)

野崎 眞公

はじめに…これまで、特高として活躍した纏纏弥三、大久保留次郎や思想検事・池田克らが戦後政治・司法にも深くかかわっていたという事例を書いてきました。読者からは非相川勝六についても書いてくれとの要望がありましたので、今回から彼の戦前・戦後の活動の一端を紹介したいと思います。県立平和台公園に上がる正面階段の手前右側に彼の銅像、左側に相川の功績を讃えた掲示板があります。

1. 相川勝六（1891.1.2. - 1973.10.3）の主な経歴

相川については、「八紘一宇」の塔設計画をした当時の宮崎県知事であることは、皆さんご承知のとおりです。まことに、彼の主な経歴を見ておきます。1891年（明治24年）

待望の映画 宮崎市での上映決定 ・わが青春つきるとも 「伊藤千代子の生涯」

伊藤千代子さんは実在の方で小林多喜二の葬儀にも出席されています。

宮崎市での上映は

- ◎10月2日(日)
- ◎宮崎市民文化ホール
イベントホール

*詳細は後日お知らせします。
宮崎市以外でも上映を予定しています。
5月に宮崎サポーターの会を開催します。

宮崎サポーターの会会长 南 邦和
問い合わせ:事務局長 岩切 八郎
090-9568-2639



「冬の名残りの
見える春」

して挨拶。同年12月、宮崎神宮で祖国振興隊の結成式を行し、日中戦争勝利へ向けて県民を鼓舞していった。

次回につづく

『閑話休題』

山でのキャンプで、土産に持ち帰って自宅でも

『春の恵みを味わう、手軽な山菜料理』

①『藤の花の酢の物』

咲ききつて散り始めるくらいの花びらがおすすめ。

熱湯に花の色止めの酢を入れて、サッとゆでる。

冷水にとつて冷やし、絞って甘酢をかける。市販の

「かんたん酢」「べんり酢」などでOK。

②『藤の花ビール』

藤の花を房のままカツブに入れ、ビールを注ぐ。

ここでポイント、八分咲きの花が良い。

③『コゴミ(クサソテツ)のピーナッツ和え』

コゴミは川の土手や草地、明るい沢筋などに生える。ゼンマイ状の若芽がくるりと巻いている。その先端部分を摘み取る。

熱湯に塩少量を加えて、1~2分ゆでる。可能ならば冷水にとつて色鮮やかにとめる。ピーナッツ和えの素を振りかけあえる。

ゴマ和えの素、すりニンニク、マヨネーズ、醤油、削り節など、お好みでアレンジを!

12月に佐賀県藤津郡嬉野村(現・嬉野町)の農家に生まれた。旧制の鹿島中学校を1911年に卒業。翌年第二高等學校(仙台)に入学し1915年同校卒業。その後の履歴は、「東京帝国大学独法科卒業(1919年・28歳)高文保局保安課長兼高等課長兼外事課長(1934~36年)を経て、昭和12年(1937年)7月より14年9月まで宮崎県知事(46歳)、そのあと広島、愛知、愛媛(兼四国行政協議会長)各県知事を歴任、ついで厚生次官、厚生大臣(小磯内閣)となる。昭和41年勲一瑞宝章をうく」と記しています。『白樺ボリティクス』9(1968年)「八紘之基柱—平和塔の由来 衆議院議員 相川勝六」より)。

なお、経歴中の()、また()の年表・補足文は筆者の判断で記しました。~1910年3月26日安重根処刑、5月大逆事件、8月韓国併合・10月朝鮮総督府設置、1914年第一次世界大戦、1915年「対華21か条要求」、1918年シベリア出兵、1919年朝鮮で3.1独立運動(万歳事件)~

上記の経歴について補足すると、1923年(大正12)相川は、1934年(昭和9)内務省警保局保安課長兼高等課長に昇進。(神奈川の選舉蕭清に成果を上げて、・政党解体主義の「新官僚」運動の先頭に立っていたという)。1935年(昭和10)大本教の教祖、幹部を一斉検挙(6名起訴)、1936年(昭和11)「2・26事件」の察知に手抜かりがあり、その責任をとらされ朝鮮総督府刑務局外事課長に左遷。1937年(昭和12)7月7日宮崎県知事に任命され、朝鮮から日本に帰途中に盧溝橋事件を知らされ、同年7月18日、相川は北支事変県民大会で宮崎県知事と

多喜二の忌に (2)

小林市 秋元 ふき

まして。子どもの頃にもいやいや習っていたのだが、いつかきちんと先生に付いて基礎から学んでみたいと思つていたのだ。ねらいはもちろん、伴奏の上達。

例年なら一年に1～2曲、祭典で歌う曲の伴奏だけを必死で練習して、アワワワ・…という感じでどうにか間違えずに弾く、ということを繰り返してきた。しかし、習い始めてみると、毎回のレッスンで「目から鱗が落ちる」思いをしている。

- 柔らかい音を出したいときは、鍵盤に当てる前からソフトにソフトに指を動かすこと！
- 指番号のついていないところの弾き方をどうするか、最善の方法を見つけて弾くこと！
- 親指は力が強いので、飛び出さないように加減して弾くこと！
- 和音の中のメロディラインを響かせて弾くこと！

こんなことも知らずに弾いていたのだと思うと、穴を掘つて入ってしまいたいくらいだが、レッスンの成果（？）があれば、それ以前の下手さはむしろ進歩の比較材料になるのではないかと開き直っている。

「多喜二へのレクイエム」で言うと、間奏に挟まっている「歓喜の歌」のフレーズが、これまでただでガンガン鳴らしていただけだったのだが、今は天上からの音楽が降り注ぐように、という意識で弾いている。全体を繰り返し貫くペースのリズム（♩・♪ ♩ ♪ ♪）も、多喜二の命の鼓動が続いている（そして消えてゆく）イメージで大切に弾くようになつた。

とは言うものの、頭で分かることと

実際に弾けることは全くの別物、
まだまだ練習あるのみだ。

コロナが収まって、どこ

かで披露できる日が来るのが楽しみである。



花びらの先、緑が可愛い